

「読む力」を高める

指導の工夫

三年上「ありの行列」の実践から

新しい学習指導を考える会

一 「新聞作り」と読むことをつなげる

三年生の説明文を読むことの学習では、何よりも子どもたちの「知りたい」「調べたい」を大切にしながら、二年生での学習をさらに発展させて「まとめり」(段落)や「大切なこと」(要点)に気をつけて、内容を正しく読み取っていく力を育てたい。

そのためには、「新聞作り」という情報発信活動を軸に展開することが有効である。見出し、リード、本文の構成という「新聞」の特性は、そのまま「テーマ(主題)」「要点」「構成」という「読み」の観点となる。「ありのひみつ」を調べて新聞を作るつ」という課題は、子どもを意欲を喚起しただけでなく、説明文を情報ソースとして新聞を作り、発信、交流するという一連の情報活動の中

『行列ができるわけ』がいいね。付箋紙をA3用紙の上で並べながら、教材文の文章構成にも気づいていった。「記事作り」は、付箋紙にまとめた要点に自分の感想を加えて、下学年に読んでもらえるように書きぶりに気をつけて書いていった。『道しるべ』ってどういう意味かわかるかな?」「国語辞典で調べたら?」「……こうしてできた「ありの行列新聞」は、子どもたちによつて早速、一年生に配られた。休み時間には、下学年の子と一緒に、ありの行列を観察する姿も見られるなど交流が深まっていった。

三 「もっと知りたい」を新聞作りにつなげる

「ありのひみつをもっと知りたい」という子どもたちの声を受けて、自分の「あり新聞」作りに取り組み「ことごとした。」「ありの一生について知りたい。」「ありの種類は?」「ありの食べ物?」「ありの巣は?」つなっているのか?」「などさまざまに「調べたいこと」が出された。今度の「取材」は、範囲を広げ、学校図書館の図鑑や、教師があらかじめインターネットで調べてプリントアウトした資料などを選ぶようにした。付箋紙を使って要点をまとめながら読み進め、記事を作る子どもたち。中には、家の近所の公園のありの様子を観察した子どもいて、一入

で子どもが進んで考える場を生み出していった。

二 新聞作りという目的をもつて読む

「ありの行列のひみつを調べよう」という課題意識は、「あり」一年生に新聞にして教えてあげよう」という相手意識と目的意識が明確になった学習活動につながっていた。新聞作りは、編集会議と名づけたグループごとの話し合いを中心に行われた。「取材」として、まず教材文の「ありの行列」を段落ごとに読んで、「大切なこと」(要点)をまとめていく。まとめ方として、いちばん大切な文(キーセンテンス)を見つける。大事な言葉(キーワード)を見つけてそれをもとに短い文を作る。いくつかの大事な言葉をつなげて短い文を作る。の三点を確かめ、付箋紙に書くこととした。単元名から段落ごとに、キーワードやキーセンテンスを見つけてサイドラインを引いていく子どもたち。グループで見合いながら、自然と「読み」の交流が始まる。「う」でしようか。」「問いの文末表現の大切さに気づいたAさん。その問いの答えが書いてある段落を見つけたBさん。付箋紙に書かれた要点が整理、吟味されていく。

次に、新聞の「見出し」と「本文の構成」を相談する。『ウィルソンの実験』ってというのはどう?」「ここは

ひとりの興味・関心や生活とを結んだ記事が生まれていった。絵を上手に描けない子からの要望で、図鑑の写真や絵をコピーして切り貼りできるようにするなど、視覚的にも工夫することができた。

四 新聞による学びと交流

できあがった新聞は、まず互いに読み合つて感想を付箋紙に書いて交換した。見出しの工夫や書きぶりに着目したコメントも見られ、「ありの行列」で学習したことが生かされていたことがうかがわれた。廊下のコーナーに掲示された新聞は、他クラスや他学年にも読まれ、「読者」からのコメントや手紙などの反響もあり、子どもたちの交流も広がっていった。

